



TITLE:

<講演>"森里海連環学"と社会連携

AUTHOR(S):

天野, 礼子

---

CITATION:

天野, 礼子. <講演>"森里海連環学"と社会連携. 時計台対話集会 2011, 7: 43-50

ISSUE DATE:

2011-02-28

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/176977>

RIGHT:

講演

# “森里海連環学と 社会連携”

作家

天野  
礼子

あまの  
れいこ



1953年京都市生まれ。1988年、文学の師・開講健とともに“川の国”のダムに警鐘を鳴らす国民運動を立ち上げ、育てた。2004年から高知県と島根県で、「森里海連環学」を普及している。2008年に養老孟司東京大学名誉教授らと「日本に健全な森をつくり直す委員会」を結成、日本各地の「山でがんばろう」としている人々との連携を深めている。2010年、国際森林年の委員に就任。近著に、『石油に頼らないー森から始める日本再生』（共著、北海道新聞社）、『有機な人びとーおいしく安全な食を求めて』（朝日新聞出版）など。

## “森里海連環学”と 社会連携

森里海連環学との出会いの場が法然院でした。二〇〇四年十二月。北海道で間伐材を使って家をつくっている会社が、一年に一回、その会社の名前を前につけて「法然院 森の教室」というのをやっていました。その進行役を毎年、私がしていたのですが、そこに田中克先生が来られて、その時先生から「森里海連環学」というものが京都大学に、その前年二〇〇三年に誕生していたと聞いたわけです。

**海から戻ったサケは、クマの餌になり  
最後には森の栄養になっている。**

私は二〇〇二年に、友人のC・Wニコルさんに勧められて、カナダに行きました。ピクトリア大学のトム・ライムヘン教授の調

査に招待されたのです。カナダでは、サケが四年目に故郷の川に帰り、産卵する時、自分の身体で、海のチツ素、N15を運んでいく。それが実は、森の栄養になっていたということを調べているのです。サケ一族は九月から一〇月にかけて、約四〇日にわたり、カナダ中の川に溯ります。そしてクマが、年間の食糧の四分の三を、この時期のサケを食べて摂るのですね。クマはおもに夜、食事を取るのですが、その時期三頭のクマは約七〇〇匹のサケを食べます。平均すると、一日十七匹くらいのサケを食べるわけです。そのため、大急ぎで、おいしいところだけを食べます。残したサケを、クマよりも小さな動物たちが次々と食べていきます。最後には、ウジ虫たちがそれを利用します。

トム・ライムヘンさんは、木の年輪を小さな筒状のもので採って、その年輪の中に海のチツ素が入っているのを調べたのです。同

位体と言って、どんな形になってもそのものがあるというところが分かる、それを近代の科学では調べられるようになりました。その同位体を使って、トム・ライムヘンさんは、サケが海のチツ素を自分の身体で森に運んでいて、チツ素が入っている木の年輪の方が、入っていない木よりも、倍の太さをしていると、分析したんですね。私はそのことを知ったときに、「この学問が日本にもほしいなあ」と思っていたのです。そして二年後に、田中先生が来られて、「尾池総長が天野さんに会ってこい」と言うので来ました。実は私たち、「森里海連環学」を作ったんです」と言われたのです。その「森里海連環学」は、ヒラメの研究者である田中先生と、人工林の研究者の中でも、人工林を明るい森にしていくなきだと言われている竹内先生のお二人、海と森の先生が出逢って作った学問でした。そのことを田中先生からお聞きしたときに、本当にホツとしました。

## 二〇世紀に壊した森と海のつながり。 これを再生させるのが、 二十一世紀の役割では。

私自身は、一九八八年から、日本の真ん中にあるダムのない最後の大河、長良川に河口ダムが造られようとしていたので、国を相手に戦う、ということをやってきました。もうこれ以上日本にダムはいらない、川を守ろうと、声高に言わなければならぬ日々を十五年も過ごしてきましたのです。田中先生たちの学問に出逢ったときに私は、「もう大声で何かをしてはいけない」ということをいわなくて済むなあ」とホツとしました。でも、田中先生に、「どうして、森里海連環学のですか、森里なんですか、森川じゃないんですか」と聞きました。

田中先生は、「森と川と海はつながっていたんだ。それを壊したのは人間でしょ。人間たちは二〇世紀の間に、森と海のつながりや、つらなりを壊してしまいました。地球上でも同じことがすべての国で行われました。それをやったのは誰でしょうか。里に住んでいる人間ですよ。二十一世紀はその人間たちが森

と川と海のつながりやつらなりを直さなければならない。そんなことが、自分たちが二つの学問を誕生させたことによつてできるとは思わないけれども、私たち科学者も、森と川と海のつながりやつらなりを壊すことに確かに加担した人間の一員。だから、科学者としては、二十一世紀は二〇世紀と違うことを里に住んでいる人間が考えるための学問を誕生させる。それから、海を研究している研究者は、森のことを考えること。森の研究者は海のことを考えること。川を研究している人間はその両方をつなぐということを考えること。こんなことが一番大事だと思っただんです」と言われたのです。

確かに、アメリカなどに川やダムのこと、あるいは公共事業のことを勉強しに行くと、河川工学をやっている人の必須学問が生態学です。また、生態学をやっている人の必須学問も河川工学です。ですから、かなり前から、そういつたことが、私は重要であると思つていたのです。その時に、今日のお話になるのですが、「社会連携」ということがいちばん大事になるのではと思つていました。そこで、森と川と海のつながりが一番目に見える高知県へ行き、当時の橋本大二郎知事に、横浪半島にある県の

施設を京大に貸して、「森里海連環学」を導入されるようお願いしました。次に、高知新聞社に相談をいたしました。それで高知県で、「自然に学ぶ」森里海連環学」というカルチャー教室が、私をコーディネーターに、田中、竹内両先生らにもお出でいただいて始まったのです。

また、仁淀川の源流部では、竹内先生と「千ヘクタールの森を、死ぬまでに間伐しようね」ということを約束しあいました。先生は、池川林産協同組合をつくらせ、作業道づくりを指導されています。「自然に学ぶ」森里海連環学」というカルチャー教室にも、だんだん人が集まるようになりました。今は高知だけではなくて、島根県の一番西の端にある高津川という、八十一キロメートルの長さがあつて、本流にダムがない、水質日本一を二回も取つたことのある清流を舞台に、山陰中央新報社という新聞社とも、高知新聞社と同じ、「自然に学ぶ」森里海連環学」という名のカルチャー教室をやっています。そこには、竹内先生や白山先生、柴田先生にお出でいただいています。

皆さんのお手元の資料にこういう新聞連載記事と、いちばん後ろには、山陰中央新報社文化センター特別講座「自然に

学ぶ“森里海連環学”というペーパーがあると思います。新聞連載は、私がカルチャー教室をやるだけではなくて、月に一回、「森里海連環学」を連載しているものです。また、皆様のお手元にはまだ発表できないので配っておりませんが、こんなペーパーもあります。「総合特区の提案“森里海連環”高津川流域ふるさと構想」。いま国が提案している総合特区に、島根県の高津川流域では、高津川の河口である益田市、そして津和野町、吉賀町といった二市と二町が、森里海連環学を使って、国の事業でこの地域をどんなふうに、若い人がたくさん入ってきて元氣な町にできるかという構想をみんなで考えている、というようなことを始めようとしています。

先ほど、久山さんがお話になりました法然院は、私より若い方が住職で、私とその方とは友人なのですが、久山さんご夫婦とご一緒にもう二十五年以上「森の教室」をやっております。そんな子どもたちのための「森の教室」、それから私がやっております、大人のための「自然に学ぶ“森里海連環学”」というカルチャー教室。こういった学校の外にある教育が、二十一世紀に、人間の生き方を変えるだけではなくて、自然と自分の生き方

を考えるための学問として、重要なものではないかと、私は思うのです。学校で勉強したことだけで人が生きていくことができないことは誰でも知っています。けれども、今まで自分がやってきたことと、一つだけでも違うことをやらなければ、私たちが間が二〇世紀に犯した、森と川と海を分断してしまったことを直すことはできないと思っています。そのことをやるには、たとえば今日来てくださった方が、ここで聞いて帰ったことを自分の家族にしゃべる、孫にしゃべる。そういった、人から人へと伝えていく。そういうようなことが、実は意外に重要なことではないかなと思っています。

**二〇一一年は「国際森林年」。**  
**この年にこそ、もっとパワーある集会を。**

今日、白山先生の最初のお言葉の中に、「今までの時計台対話集会を、自分たち自身も、そして今日聞きに来られている皆さんも、ここで一度考えてみよう」というようなお話がございました。私は、「やはり今日は人が少ないなあ」と思っております。

す。だんだん減ってきているという傾向も、今日わかりました。何かもう一つ、たとえば新聞社にしようちゅう書いていただくような手法を、私たちは持たなければいけないんじゃないかなあと思います。それから皆さん、今年は「生物多様性年」ということでありました。先日は、前原外務大臣が「生物多様性年は今年で終わりません。あと二〇年間は、生物多様性」のことを、私たち地球に住んでいる人間は考えていくのですよ」と記者発表しました。言われましたけれども、実は十二月十八日に、一年間の「生物多様性年」は二応終了して、十九日からは「国際森林年」になります。次の「国際森林年」になって二年間の間に、私はもう一度この時計台対話集会を、「これで総括してやる」のではなくて、倍や三倍くらいの方が来るような仕組みでやってみたらどうかと思っています。「国際森林年」の年に、「森里海連環学」が集会をしないというなら、どのようにして、「木文化」を「創生」したり、「再生」したりできるのですか？ 柴田先生。

たとえば、後ろには吉田山があります。時計台対話集会の前に、あの吉田山に午前中みんなで行く。たとえば虫好きの

養老先生にもう一度、時計台対話集会に来てもらって、養老先生と大人の虫取りをする。あるいは、子どもたちが来たかったら、一緒に来ればいい。そういう野外活動と、こういう座学を組み合わせるというふうな工夫。またそのことをやることを、新聞社と提携して、とても安い価格、あるいはほとんどゼロの価格で、そのことを新聞に周知することによって、いつも来てくださっている皆さん以外の方、もっと若い人や子どもたちも一緒に来てくれるようなこと、そういったことを考えたらどうかと思います。人が来ないのは何故か。もっと工夫を十分してから、やめてほしいものです。

**いま必要な情報を学問と結びつける。  
それこそが「社会連携」なのは。**

もう一つ。今日、竹内先生が来られていないんですね。退官後の竹内先生を、フィールド研は二度も、この時計台対話集会に呼ばれていないのです。今日は田中先生だけで、自分は呼ばれていない。それが、毎年、会場には来られていた竹内先生に、「今

日は行かなくていいや」と思わせたのでしょうか。ヒラメの稚魚の研究をされていた田中先生は、退官後しばらく外国に行っておられましたけど、竹内先生と私は、高知と島根の二カ所で、カルチャー教室の他にも、大人の行政マン達の勉強会もやってきています。

皆さんの多くは「存在しないかもしれませんが、去年の十二月三〇日に、「森林・林業再生プラン」という、林野庁から「これからは日本の人工林をきちんと使っていく」というプランが出ています。今年の六月には、「新成長戦略」というものも発表されて、その中に「林業を、それできちんとそこで暮らしていくものにしていう」ということも書かれています。そこで竹内先生と私は、具体的に高津川という島根県の川の流域で、行政マン達を鍛えて、日本版の“フォレスト”を育てようとしています。こういった生（なま）の、「いまどういうものが学問として必要で、それをサポートする人たちを小さいときから育てていくにはどうすればいいのか」ということとか、もつと生の、今も申し上げましたような、いま必要な行政情報を学問と結びつける、それこそが私は「社会連携」だと思っているのですが、こ

ういったことがこの学問には、今いちばん求められているのではないのでしょうか。

また、田中克先生は竹内典之先生と「森里海連環学」をつくられました。それが、京都大学から出たことを、私はとても誇りに思っています。私は、中学から同志社に学びまして、京大生ではなかったのですが、実は大学生の時から、京都大学にいらつやった今西錦司先生の釣りクラブに入って、ほとんど同志社にはいないで、そういった京都大学の先輩方と釣りに行って、フィールドで遊びながら学んでいたのです。ですから、いちばん「フィールド学」ということの重要性を若いときから知っている人間の一人だと思っています。自分自身も、フィールドで学んだことしかお話ししないことにしています。東京大学から、この「森里海連環学」は出なかったのですよ。それは、フィールドを大切にしてきた京都大学だからこそ生まれた学問だと思っています。この学問が、もつともっと日本中の市民の中に入っていて、社会の中に入っていて、それを学びたいと思う高校生が、京都大学に入ってくる。そのための仕組みをもう一度、つくり直してはいかがですか。それが「国際森林年」、来年の、京都



大学「森里海連環学」における使命ではないかなあというふうに思っております。白山先生、柴田先生、大学の皆さん。時計台対話集会をこれでやめてしまわず、ぜひ、来年はまた新しい試みを考えていただければと思います。

どうも、ありがとうございました。そしてこれからも、みんなで、この学問を広めていきましょう。